昭和57年6月26日第3種郵便物認可

わせじま

株式会社
宇和島新聞社
郵便番号 798
宇和島市中央町11番9/10
電話(0895)22-5021
22-5031
発行 ©愛媛新聞社 1994

花ごよみ

ニブシ　日本各地に自生するモクレン科の落葉高木。冬枯れのまだ風の冷たい山野に、いち早く大型の白い花を満開し、暮を告げる光景は感動的である。「遠目にも白こそ風の辛夷（こぶし）なれ」（野見山朱鳥）。浮十弩くらいの六弁花は葉に先立って咲き、花の下に若葉を一つ伴うことが多い。つぼみの形、あるいは果実の形が握りこぶしに似ているので、コブシの名が付いたという。漢名の辛夷は本来はモクレンのこと。「開花の多い年は豊作」など、作柄や気象を占う言い伝えが各地にある。小高木のタムシバとよく混同される。

蕨湾

ヘドロ浄化剤の効果調査

海底をビデオ撮影

宇和島漁協「以前よりきれいに」

業者が潜ってビデオ撮影した蕨湾の追跡調査

硫化物の濃度を分析するために海底の泥を採取する市水産課職員

真珠養殖が盛んな宇和島市の蕨湾で二十二日、地元の宇和島漁協（山下博文組合長）組合員らが、昨年散布したヘドロ浄化剤の効果を追跡調査した。潜水して海底を調べた浄化剤製造業者によると「目が光って見えるなど、海はきれいになりつつある」と話している。

同湾では約一十年前から真珠養殖が始まった。これまでに目のフンなどによるヘドロが水深一十～三十層の海底に数十㌢積もっているという。ヘドロから出る硫化物が漁場環境悪化を引き起こし、目のへい死にもつながるといわれる。

「海をきれいにして子孫に残そう」と、同漁協の蕨、平浦地区の養殖業者がヘドロを除去しようと取り組んだ。昨年十月末、熊本市の民間会社が開発したヘドロ浄化剤を八万平方㍍の湾内に散布した。

浄化剤は嫌気性バクテリアを砂状の岩石に染み込ませている。バクテリアが硫化物を分解し、海底を砂地にする仕組み。この業者は熊本県や長崎県などでアサリ漁の現場でも効果をあげているという。県内では明徳漁協管内でも試みている。

同日は漁民が見守る中、業者が海に潜り、海底の変化を調査。様子をビデオに収めた。業者は「平たんだった海底がバクテリア効果によりデコボコが出来ている。ナマコやイソギンチャクの生物も見られる。貝殻も光って見え、きれいになりつつある」と報告した。

撮影と同時に、市水産課職員が硫化物の濃度を調べるために、海底の泥を採取した。十月末の浄化剤散布の際にも採取、分析した結果は硫化物濃度は汚染の目安よりも低かった。

養殖業者と宇和島漁協は、ビデオを検討した結果などを踏まえて、今後も浄化剤散布と調査を続けるかどうかを検討する方針。